

---

# Phenomenological Perspectives in Cognitive Linguistics

---

SHIMIZU KEIKO

*Prefectural University of Kumamoto*

キーワード：認知言語学、現象学、メトニミー、多義性、構文文法

## 0. はじめに

「言語」の本質の探究は、人間に関する学問領域の中でとりわけ重要な意味を持つ。生物学において人類と他の生物を隔てるのは言語であるとされ、現代思想においては「言語学的転回」を経て「概念・意識」の研究から「言語」へと焦点が移り、脳科学や認知科学において人間の脳および身体と言語との関係が自然科学的に解明されつつある。このような時代において学問は細分化され分断化される傾向にあるが、異なる領域で同じような方向を目指していることがある。本稿の目的は、現代哲学の一分野である「現象学」の思考方法と、言語学の一アプローチである「認知言語学」の基本的原理が多くの点で方向をひとつにし重なりあうことを具体的に提示することである<sup>1)</sup>。本来、筆者は言語学を専門分野とするため、現象学については哲学全般に関しては一素人にすぎないが、言語学という学問が、人間とそれを取り巻く世界がどのように人間の知識の中に存在しているのか、人間は世界をどのように認識しているのか、という哲学的な問題と分離不可能に密接に結びついていることを確認してみたい。

## 1. 現象学とは

「現象学」とはフッサールに始まる哲学的思考である。人間には現象しか把握できない、という考えはそれ以前からあったが、これを思考の方法としたのがフッサールの現象学である。主体が持つ認識は主体の意識に与えられる現象（知覚、感情など）からまず始めるとし、そこからどのように「世界認識」を得るのか、という問題に対して答えようとした。これは主観と客観の（不）一致の問題でもある。唯一の客観的世界というものが存在すると仮定するならば、その世界で生きている人間個々の主観はどのようにその客観的世界を把握することができるのか。それとも唯一の客観的絶対性など存在しないのか。この問題を解決するためにフッサールが提案した方法的確信が「現象学的還元」なのだが、この「還元」が具体的にどのような作用を意味するのかという解釈において様々

な異論があるようである<sup>2)</sup>。現象学を「客観的真理」への到達方法であると見なしてしまえば、それではポスト・モダン以前の哲学となってしまう現代的な魅力はないだろう。しかし本稿では、比較的最近の現象学研究（門脇 2004、谷 1999、竹田 2001、2004、西 2001 など）による「思考方法」としての「現象学的還元」という解釈によって立ち、その解釈からみた現象学的思考方法がいかに認知言語学の原理的考え方と高い親和性を持つかを考察する。

## 2. 現象学的還元と Construal (捉え方)

フッサールのいう「現象的還元」とは何かを捉えるために、まず定義と思われる指摘をいくつか以下に引用する。

- ・フッサールが自然な世界像を「還元」せよと言うとき、それが意味するのは、われわれのもっている「客観的な世界視線」は、実際は「自分からの視線」（主観的な視線）から“構成”されているから、これをいったんすべて「自分からの視線」に置き戻すことができる、まずそうしてみよ、ということです。これが「自然的態度」を判断停止して（エポケーして）純粹意識に「還元」する、ということの内実です。（竹田 2004:34）
- ・現象学的還元の方法の核心は、さまざまな事況についての「確信の条件」を意識内の所与（与えられている現象）において確かめようとする点にある。（竹田2001:27）
- ・「いま自分が現に（意識において）感じていること」あるいは「経験していること」が正確に言語に置き換えられうるという可能性、つまり「意識経験」がそのまま「イデア的諸対象」へと置き換えられるという可能性が現象学の内省理論の前提であり、かつ根拠となるということになる。（竹田 2001:27-28）
- ・世界が客観的に存在している、という常識的な信念のなかでは、“世界及び一切の諸対象の意味と存在をつくりあげている意識の働き”は隠されている。この常識的信念をエポケーすることによって、このような意識（純粹意識）の存在を露わにする作業が、現象学的還元なのである。（西 2001:147）
- ・事物や世界、そして体験じしんをも客観的に世界のなかに存在しているものとみなす見方（客観的定立）をすべて退けて、現象＝体験のみに立ち戻ること。こうした“準備作業”が、「心理学的－現象学的還元」なのである。（西 2001:170）

以上から判断して簡単に括ると、「現象学的還元」とは自分自身の知覚や直接

体験から個々人の認識が発生する、ということであり、言語表現について言えば、話者が自身の知覚や体験内容を言語で表現する営みが言語活動の根本である、ということになる。

この主体からの直接的知覚を存在認識の基本とする方法を Langacker の提唱する認知文法に重ねてみると、言語活動において、言語主体（概念化者）が対象をどの様に概念化したかという、対象の「捉え方（construal）」が言語形式によって表現されるものとなる。空間的、時間的に一点を占める同一事象に対して、それを誰がどこからどのように見るかによって「捉え方」は多様となる。その多様な捉え方それぞれをそのまま言語化すれば、結果として様々な言語表現として具体化される。

捉え方にはいくつかのタイプの認知的要因が関与している。例えば Langacker(2008:55-89) は、記述性 (specificity)、焦点化 (focusing)、際立ち (prominence)、視点 (perspective) をあげる。<sup>3)</sup> 以下 (1) の例では、ランプ (lamp) とテーブル (table) のどちらに焦点を置くかによって (1 a) と (1 b) の表現が可能になるが、これは際立ち (prominence) が関わる捉え方の違いである。

(1) a. The lamp (tr) is above the table (lm).

(ランプはテーブルの上の方にある)

b. The table (tr) is below the lamp (lm).

(テーブルはランプの下にある)

(Langacker 2008:71 日本語文は筆者)

この要因に加えて、さらに以下 (2) においては、対象物 (岩 rock と木 tree) に対して概念化主体がどの位置からその場面を見るかという視座 (perspective) が言語表現に関わっている。立ち位置によってそこからの「見え」は当然異なるからである。

(2) a. The rock (tr) is in front of the tree (lm). The tree (tr) is behind the rock (lm).

(岩は木の前にある。木は岩の後ろにある。)

b. The tree (tr) is in front of the rock (lm). The rock (tr) is behind the tree (lm).

(木は岩の前にある。岩は木の後ろにある。)

(同書 :76 日本語文は筆者)

また視座とは、言語主体が場面を実際に見ている場合の「見え」という知覚体験に限らない。

(3) a. The hill gently rises from the bank of the river.

(丘は川岸からなだらかに高くなっている。)

b. The hill gently falls to the bank of the river.

(丘はなだらかに川岸へと低くなっている。)

(同書 :82 日本語文は筆者)

上の (3a) や (3b) の文を発するからといって、それぞれで描写された景色を話者が必ずしも目前に見ている必要はない。両文が表すのは単に話者が「頭の中で思い描いた内容」でもよく、丘 (hill) を上の方から川岸へと稜線が下がるように想像するか、下の方から丘の稜線が上に伸びているように想像するかという概念化の違いが (3a) と (3b) の違いである。この場合、概念化する内容をどのような方向性をもって「心的走査 (mental scanning)」するかが言語表現の差異に反映される。同様に同じ一つの「坂道」を時に「くんだり坂」と言ったり別の時には「のぼり坂」と言ったりするが、そう言うたびに話者が実際に坂の上や下に立っていなければならないわけではない。しかしながら、そうした異なる概念化が可能なのは、概念構築のための根本的な基礎としてまずはじめに直接体験に基づいた概念化が存在するからである。

このように言語表現主体からの「見え」や直接体験を概念構造の根幹におき、主体の概念化内容を言語の意味とする認知言語学のアプローチは現象学的還元の方法と平行するものであるといえる。

### 3. スキーマと事例、意味拡張、多義性

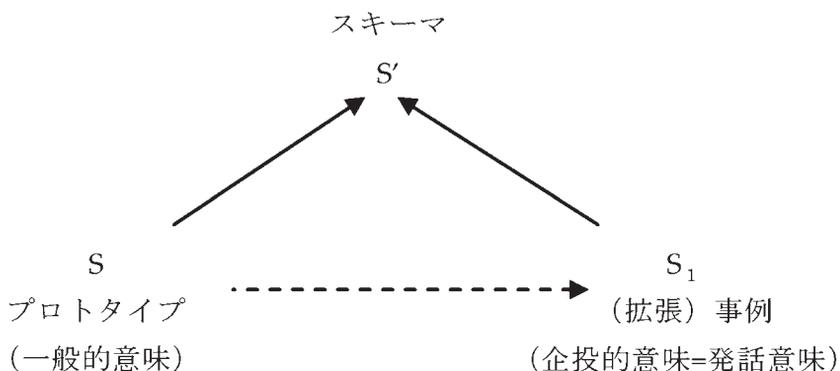
#### 3. 1. 一般的意味と企投の意味 (発話意味)

ワイトゲンシュタインは、言語とは、始めから言語使用者相互の間で暗黙の了解のうちに意味構造が決まっており、話者全員が理解している本質的な共通項 (意味構造) のある「一般意味」を備えているようなものではなく、「互いに類似した言語ゲーム」と見なすべきだと主張し、さらに言語の意味構造はアリストテレスに発する古典的カテゴリー構造をなすのではなくむしろ部分的な類似性 (家族的類似性) によって緩やかに結ばれている、という主張をした。認知言語学においても、言語の意味構造は多義的であり、一言語形式が持つ複数の意味はばらばらに無関係に存在するのではなく、中心的意味と周辺の意味が何らかの類似性によってつながったプロトタイプ構造をしていると考える。しかし、この多義構造やプロトタイプ構造はどうして生じるのだろうか。以下、竹田 (2004) の現象学からの言説を糸口に考察を始めたい。

- ・…ある言語記号が表現するのはその語の「一般的意味」であり、ある言語表現は「一般的意味」を用いて（＝利用して）、それ以上の「企投の意味」を他者に投げかけます。受け取るほうも同じで、「一般的意味」を手がかりに「企投の意味」をつかもうとします。要するに、言語の意味のシステム（体系）は、つねに一般的規定性を“超え出る”場所をめがけて使用されるのです。これが、言語の「意味」がつねに多義的に現れ、自己言及や決定不可能性という現象を表し、規則の規定性があいまいとなる本質的理由です。（竹田 2004:176 下線 筆者）
- ・発話行為は、つねに一般意味を“超え出よう”とするものであり、一般意味と発話意味のズレこそが本質的なのです。（同書:174 下線 筆者）
- ・実存的な関係企投が言語の「意味」の基底の本質であり、記号としての言語の「意味」はそれを根拠として成立している。（同書:173）

簡明に言い直してみよう。言語使用とは、話者が発話時点にすでに持っている言語知識（たとえば言語形式Fとその一般的意味S）をもとにして、表現対象とする具体的状況にあてはめて形式Fを使用しているのであり、その時点での言語使用における意味内容はS1である。このSとS1の内容がまったく一致することはない。一般的意味Sから多かれ少なかれズレのある「超え出る」意味S1を表すために言語形式Fを使うのである。これを認知文法的に言いなおすと、プロトタイプ（prototype）と事例（instance）（あるいは拡張事例（extension））の関係になる。さらに言語知識の動的側面も捉えるならば、プロトタイプと事例を一般化し統合するスキーマ（schema）を考えることができる。この3者の関係は以下のように図示できる。

<図1> 一般的意味と発話意味



具体的に考えてみよう。日本語の「ネコ」という言葉をすでに何回か聞いたことも自分で使ったこともある子供が、ある日公園で見つけた小動物を指して「ネコ」と呼ぶ。このとき、この子供が過去における何回ともなしの「ネコ」という言葉の使用から理解している概念構造がこの子供にとっての「ネコ」の一般的意味Sである。そして、この場面で実際に見た小動物（の理解）がこの場合の事例あるいは現象学的に言えば企投的意味（発話意味）である。この小動物が本当に「ネコ」である場合もあろうが、実際には「イヌ」や「キツネ」であるかもしれず、その場合この子供が「ネコ」という言語形式に対して対応させている概念構造が、大多数の成人日本語話者が持つ概念構造とまだかなり食い違っているということを示しているにすぎない。

認知言語学では上記<図1>のカテゴリー化構造によってメタファー表現も説明する。言語形式 mouse のプロトタイプの意味（ねずみ）を利用して、形状的に似ているコンピュータ周辺機器を mouse（マウス）と呼ぶ場合、この mouse の新しい用法は、指示対象の形の類似性にもとづいた拡張的使用事例である（Langacker 2000:100）。こうした企投的な言語使用によって、言語は多義構造を持つように拡張する。また場合によっては、具体的事例 S<sub>1</sub> はさらにプロトタイプの意味 S に取り込まれることもあり、実際には S（一般的意味）自体が形式 F を使用する度ごとに無意識のうちに刷新されてゆく。その都度使用される企投的意味が一般的意味とは常に多かれ少なかれ異なるゆえに、言語は意味変化の可能性をその本質的機能の原理の中に孕んでいる。具体的言語使用における企投的意味こそが実は言語システムを支えていることを考えれば当然の結果ではある。具体的言語使用が言語システムを作り出し維持している、という考え方は認知言語学においては「動的使用依拠モデル（Dynamic

Usage-based Model)」(Langacker 2000)として提案されている。このモデルでは、文法とは実際の発話からボトムアップ的に得られる高次および低次のスキーマの膨大なネットワークとして存在する、とされる。

以上の議論ではとりあえず所与として扱ってしまった言語の「一般的意味」あるいはプロトタイプ的な意味とは、一体いつどこで言語主体は獲得するのであろうか、という問題が残る。プラトンのアイデアが客観世界に暗黙裡に存在する、という考え方を現象学は棄却する。認識の根拠を言語主体の直接経験、知覚に還元するという方法を一貫させるなら、それは子供の言語習得過程を現象学的方法で考察するということを意味するが、すでに Tomasello (1995, 2001) は言語習得における仮説として前述の使用依拠モデル (Usage-based Model) を採用している。言語習得理論にとっての現象学的思考方法の有用性については稿を改めて論じたいが、竹田 (2004:172) が「(前略) 関係行為としての言語による「企投的意味」の集合的な痕跡 (積み重なり) として、言語の「一般意味」(辞書的意味) が成り立っている」といみじくも言い得ているように、子供は、母親ら養育者との共同注視場面における言語使用 (企投的意味) をごく初期の発端として、徐々に「一般的意味」ともいうべき概念構造 (プロトタイプ) を定着 (entrench) させていくのであろうと想像してもそう間違っていないだろう。

### 3.2. 多義性—MAY: 「許可」が「義務」に解釈されるとき

言語が本質的に多義の可能性をはらんでいることを竹田は以下のように言う。

- ・言語の意味の多義性の「謎」は、現実言語がそのつどの「企投的意味」を含むが、それは言語の「一般意味」とズレる、という事態の解明によってはじめて解明されます。(竹田 2004:179)

話し手だけでなく、言語を解釈する聞き手の側も同じように、その発話行為の時点で聞き手自身が持つ「一般的意味」に基づいて発話を解釈する。このとき聞き手は話者によって意図された「企投的意味」をどのように理解するのであろうか。竹田 (2001:133) は「個々の意味確信 (= 妥当) を成立させているのは、かなり広範な言語の「状況コンテクスト」である」といい、さらにスピノザの『エティカ』を引用し、「うちの広間が隣の鶏の中に飛び込んだ」と聞いても、「私は彼のことばを十分よく理解できた」といえるのは「[聞き手]に「発話者の意」を受け取ったという自然な信憑 (確信) が生じるからである」という (同書:153)。しかしながら竹田のいう「状況コンテクスト」だけではこの

発話を理解することはできない。この発話状況コンテキストに対して発話内容がどう整合性を持つのかは、主体のそれまでの体験・経験の蓄積としての百科事典的知識、世界の秩序に関する知識を参照する必要がある。このことは以下の西 (2001:255) のようにも言うことができよう。

- ・私たちは、みずから体験したことを「首尾一貫した時間的・空間的秩序」へと織り上げているのであって、その意味で、現実とは体験の調和によって形づくられた、時間的・空間的な首尾一貫した秩序なのである。新たな体験も、この現実と調和するか否かで、それが現実知覚であるかどうかが決まるのである。

上の引用中の「新たな体験」を相手が発話した言語形式とすれば、それを聞き手は「現実＝首尾一貫した時間的・空間的秩序」と調和させるべく解釈する、ということになる。前述のスピノザの例でいえば、「広間が鶏の中に飛び込む」という現象は現実として受け入れがたく、したがって自分の経験知識と一致するように修正を施して理解することになる。

具体的な事例で考えてみよう。英語の法助動詞 MAY の基本的な意味は、義務的法性 (deontic modality) の「許可」であり、典型的には以下 (4) のような例があげられる。

(4) You may stay here.

(=You are permitted to stay here.)

(黒滝 2005:35)

一方 MUST は典型的には以下 (5) のように「義務」を表す。

(5) John must obey the order.

(=John is obliged to obey the order.)

(同上)

ここで MAY が状況コンテキストによってどの様にその解釈のニュアンスを変えうるかを考察してみよう。例えば、某大学でお昼前の退屈な授業があつと5分で終了するという頃、学生たちの頭は空っぽの胃袋同然と化し、早く学食に駆け込みたいと思っているような場面で、教師が次のように言う。

(6) Ok, you may leave now.

この場合、学生たちは教室を出たくていてもたってもいられないのだから、(6) はその欲望を「許可する」という意味に解釈される。言い換えれば、この状況は、

(7) The teacher let the students leave 5 minutes earlier.

と、LET を使って表すことができる。一方、たとえば某大学教師が締め切り間際に必死に研究室で論文を執筆している時に、某学生が殆ど授業は欠席でレポートも未提出なのに卒業のために単位が欲しいと研究室にやって来て、彼これ30分以上自らの窮地を教師に説明しているのだが、当の教師は単位を与えるつもりは皆目なく自分の論文執筆に早く戻りたくて仕方がない、という状況で、先の(6)の発話をこの学生に向けたとしよう。

(6') Ok, you may leave now.

できることならこの学生は教師が根負けして単位をくれると言うまで延々と釈明をしたいのに「もう帰っていいですよ」と言われるのである。学生には「帰りたい」という欲望は全くないところに「帰る」という行為の選択肢を「許可」という形で明示される。この学生は(6)の発話を以下のように「勧告」あるいは「義務」と解釈するだろう。

(8) a. You should leave now. (勧告)

b. You must leave now. (義務)

さらにこの状況報告は以下(9)のように、LETではなくMAKEですがふさわしい。

(9) The teacher made the student leave his office.

このように本来的に「許可」を表す言語形式が「義務」のニュアンスを帯びるようになるケースは、法助動詞MAY以外にも観察される。Lee (2001:54-55)は動詞に付く接尾辞-ableの放射状多義構造を分析している。この接尾辞が付いた動詞派生形容詞の中心的事例は「～されることが可能である」という意味を持つ。This sweater is *machine washable* などがその良い例であろう。しかしThe fee is *payable* on application という文で使われるpayableは、「支払うことができる」という支払う側の選択可能性としてではなく「支払われなくてはならない」という支払う側の「義務」の意味に解釈される。通例こうした文を発信するのはこの会費を受け取る側(会費の支払い方法を決定できる側)であり、この文を通告されるのは会費を払う側であるという背景的文脈から、読み手はこの文から、I should/must pay the fee when I make an

application と推論する。「義務」という解釈は語彙項目 payable の意味として慣習化され辞書にも載っているが、元来の「～されることが可能である」という意味での使用もある (The sum is payable in monthly installments)。このように語彙項目 payable の多義化は動詞 pay とコンテキスト情報から生じた変化であり、スキーマ (V-able) のレベルで発生した意味拡張ではない。

先の (6') の MAY の場合は状況的に「義務・勧告」と解釈されるが、これは非慣習的なその場かぎりの意味である。しかし慣習化の程度はあるにせよ、「義務・勧告」の MAY も「義務」の payable もともにコンテキスト状況によって「一般的意味」(MAY は「許可」、-able は「可能」) からズレることで生じる多義性の例といえる。

#### 4. 部分と全体—メトニミー

##### 4.1. 言語におけるメトニミー表現の遍在

メトニミー表現はメタファー表現と並んで、認知言語学とくに認知意味論において、人間の認知メカニズムが言語現象を動機づけていることの証例として提示される。たとえば以下のような例が認知言語学の入門書であげられている。

- (10) a. やかんが沸騰している。 <容器—中身>
- b. 赤シャツが手を振っている。 <主体—付属物>
- c. 白バイに注意される。 <主体—手段>
- d. トルストイを読む。 <作者—作品>
- e. あの男はアルコールに弱い。 <材料—製品> (山梨 2004:74)

また、メトニミーを人間言語に偏在する現象であると主張する西村 (2005, 2006) はメトニミーの特徴として以下の3点を指摘する。

##### (11) Metonymy

- i) is pervasive in everyday language,
- ii) reflects some fundamental cognitive abilities that are not specifically linguistic,
- iii) underlies a broad range of grammatical phenomena that have traditionally been viewed as purely formal in nature.

(メトニミーは、

- i) 日常言語に遍在し、
- ii) 言語に限定されない基本的認知能力を反映し、
- iii) 伝統的には本質的に全く形式的な問題であるとみなされてきた文法

現象の広範囲にわたって、その基盤となっている。

(西村 2005 筆者 訳)

西村はさらにメトニミー言語現象のすべてを動機づける基本的認知能力として、「百科事典的知識 (encyclopedic knowledge)」にアクセスしそれを操作することができる人間の認知能力をあげる必要があると述べている。言語表現が意味する内容とは、辞書的な意味だけではなく、個人が直接および間接的経験を通して蓄積した百科事典的知識であり、複数の領域の交差するフレーム知識である。たとえば、以下 (12) において、

(12) a. 電話が鳴っている。(The phone kept ringing.)

b. 誰も電話に出ようとししない。(No one bothered to pick up the phone.)

(12a) と (12b) では、「電話 (telephone) フレーム」の異なる側面が喚起される。(12a) は主体が知覚する音を発生する物体としての「電話 (phone)」であり、(12b) では「受話器を取って相手と電話で話す」という行為を仕掛ける対象物としての「電話 (phone)」である。しかしながら、(12a) と (12b) の異なる「電話 (phone)」の使用を支える基盤として「電話 (telephone) フレーム」全体が活性化されていなければならない。電話をするとはどういう行為でありどのような目的があり、電話機が音を発するのは何のためか、といった様々な電話に関わる知識の総体が「電話フレーム」を形成する。

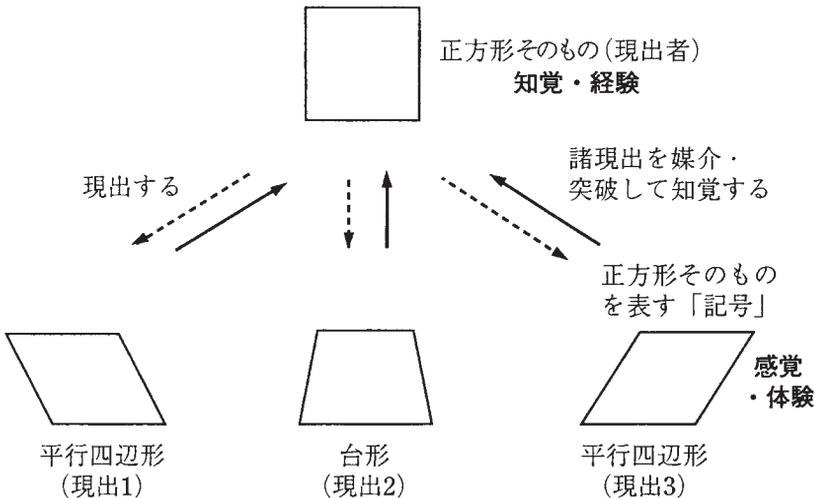
(10) や (12) の一連のメトニミー表現の「意味の不確定性」は驚くに値せず、また言語の論理性を否定するものでもない。むしろこれらは人間の意識の本質的な流動性 (the metonymic fluidity characteristic of our consciousness itself (Nishimura 2006:566)) の反映であり、語彙項目だけではなく文法的要素や構文構造の様々な振る舞いも動機付けている。<sup>4)</sup>

以上が認知言語学におけるメトニミーの捉え方であるが、このメトニミー的な認知のメカニズムを現象学の文脈ではどのように考察し、理論内に取り込んでいるのだろうか。次節でこれを検討する。

#### 4.2. 現出者の同一性と（諸）現出の多様性

現出者と現出の関係について谷（1998:46-55、2001）の議論を応用して紹介する。フッサールの「諸現出の直感は、記号として、現出者の直感を表している」という言説を谷は以下<図2>のように説明する。たとえば「正方形」を例にすると、紙に書いた「正方形」を見る場合、この「見え」が「現出」であるが、それは右から見るか左から見るか斜め上から見るかによって多様な見え方をする。「現出」は多様な表れ方をするが、「現出者」（=正方形という概念。実体や存在物のことではない）は一つに集約する。このことを「現出者の同一性と現出の多様性」と谷は指摘する（2001:58）。現出者は直接知覚ではない。斜めからみた平行四辺形という見え（現出）はそのまま直接的には正方形という概念には結びつかない。主体は「現出」の感覚・体験を突破して、そのむこうに「現出者」を知覚・経験する。この作用において、その媒介・突破の働きが「志向性」と呼ばれる。現象学の文脈で「意識は常に何ものかについての意識である」と言うとき、この前者の「意識」とは（諸）現出を指し、後者の「意識」は現出者のことを指し、この二者を結びつける心的プロセスを「についての」という関係で示している。この関係が「志向性」である。現象学における「意識」とは、現出という主体による直接体験を媒介にして現出者を経験・認知するという心的プロセス（志向的体験）である。

<図2> 現出（見え）の多様性（谷 1998:48 より）



以上の現象学的分析は、メトニミー表現についての認知言語学的分析に容易に応用することが出来る。「やかんが沸いている」(= 10a)という時、私たちに見えているのは、あるパースペクティブから見たやかんの一側面である。しかし「やかんが沸いている」といわれた時、「やかん」という語彙によってその百科事典的フレームにアクセスする上さらに、「～が沸いている」という後続表現から、そのフレームの中で「沸く」ことが可能な項目、つまりやかんの中身(水)へと、「やかん」の指示対象は簡単にそして適切にプロファイルシフトする。<sup>5)</sup>

「全体⇒部分」、「部分⇒全体」という単純なメトニミーの図式関係は、ここで修正する必要がある。私たち人間にとって、「全体」が開示されることは常にはないのである。そもそも「全体」とは何を指すのだろうか。私たち人間が体験するのは常に部分的な知覚であって、いわゆる全知全能の神の視座に立って対象を透視することはできない。人間の直接体験は何らかの一つのパースペクティブから限定される。新聞はたいてい折りたたまれていて、1面から32面まで全部の紙面を一度に見ることはできない。新幹線はホームに入ってくる先頭車両から見るか、自分の乗り込む車両を見るか、自分は乗らずに他の人が乗ったのを見送ってホームを出てゆく後方車両を見るか、など色々な可能性がある。私たちが体験する様々な個々の体験(諸現出)はすべて部分的ではない。しかしながら人間は過去の直接および間接の経験を通して、新幹線についての百科事典的知識を個々人で作りあげて持っているし、新聞は1面から32面ぐらいまであるのを知っている。この百科事典的知識は時間をかけて蓄積するものでありかつ新たな経験によって日々刷新される。部分的な「見え」からそれが何ものであるかを判断するのは、子供が好きなゲームによくある。幼稚園で、ウサギの耳だけ、ゾウの鼻だけ、トラの尻尾だけの絵や、あるいは動物の外形の影絵を見せられて、何の動物かを当てたりする。部分によってそれが何ものであるかを判断する(カテゴリー化する)能力は生命存続にとって重要だ。トラの全貌が見えてから逃げたのでは遅い。現象学でいう「現出」から「志向性」によって「現出者」を経験・認知するというのは、言い換えれば、部分的な知覚情報からその情報の発信源をカテゴリー化するプロセスとすることができる。ここでカテゴリー化の基礎になっているのは主体の知識ベースにある百科事典的知識(フレーム知識)である。全体⇔部分のメトニミー的表現内容のズレは、実際には、「言語形式F⇒一般的意味Sの想起⇒フレーム全体の活性化⇒フレーム内のSとは異なる意味部分への焦点化」という動的プロセスに基づいた記号化作用であり、慣習化の程度によっては「やかん=中身の水」という定着度の高い安定した記号関係が成立している場合もある。ここでメトニミー表現の動機付けを現象学における「(諸)現出→現出者」の関係から説明すれば、メトニミーとはその時々体験する「現出」自体、あるいはその一

部をそのまま言語化することによって「現出者」を意味する仕組みと行うことができる。

#### 4.3. 世界認識とメトニミー的思考

人間の意識作用、言い換えれば認知プロセス自体が「諸現出から現出者へのカテゴリー化」という現象学的事象であり、したがってメトニミー表現が言語現象に遍在するのはきわめて自然なことであると結論できる。しかし、さらに広い「世界」のあり方の理解にまで、この現象学的かつメトニミー的思考方法を推し進めることができる。

私たちのどのような世界への接近も、意識において経験されている現在の特定の位相からしか生じないのであって、そうした位相から独立に客観的世界それ自体をとらえることができるという、近代科学の想定は自明のものではない。

ペンのような事物は意識にそのときどきの位相で現出するが、ペンという事物それ自体を定義するものは、そのときどきの位相を超えて、より多くの隠れた現出を秘めている（中略）。つまり、事物、あるいは世界は、意識への現れと同一ではないが、その現れと関連づけて定義される。科学的にも立証されようがない「客観性」などという理念によってではなく、むしろ、個人やあるいは共同の意識への「現れ」という理念を用いることによってこそ、世界の意味を理解することができる（中略）。（門脇 2004:34-35）

私たちは人間という身体性ゆえの限られたモードでしか情報処理ができない。しかし、その身体的特性ゆえに可能である部分的知覚体験をもとにして、知覚範囲を超える世界像を構築し合理的推論を（可能に）しつつ世界に対処し生きている。こうした考え方からすれば、メトニミー的なプロセスは人間の思考方法・世界認識の原理ともいえる。次の西（2001）の発言を考えてみよう。

- ・事物は一挙にその全体が与えられることはなく、あくまでも体験の経過のなかでもろもろの「現れ」を通じて“思い描かれた”ものであるから、事物知覚における「何であるか・どのようなようすであるか」ということの妥当（確信）は最終的・決定的なものにはなりえない。（p.248-249）
- ・知覚は、時間的な脈絡の理解（記憶）によって支えられている。（p.252）

ある部分的な「見え」という知覚からの判断が妥当であるのかどうかという確信は、その状況全体が「過去の地平（＝呼び起こしうる記憶）」と矛盾しない

かどうかで与えられる。メトニミー的、部分的知覚から全体像を把握する際の、認識の飛躍を可能にしているのは、それまでに蓄積した知識体系である。そしてまた逆に、それまでの知識体系に合致しない「見え」や知覚データがあったときは、人間はそれを処理することができない。

- ・どんな知覚体験もみな、その背景として現実に関する一定のイメージをもっており、それによって「支えられて」いるのである。それとうまく調和できない体験は、現実からいわば「追放」されることになる。(同書：252)

こうした哲学的言明は単なる抽象的憶測ではなく、脳神経学においても実証されているようである (Lakoff 2004:17)。

- ・ People think in frames.... To be accepted, the truth must fit people's frames. If the facts do not fit a frame, the frame stays and the facts bounce off. (人は知識フレームの中で考える。真実が受け入れられるには人々の持っているフレームに合致していなければならない。もし事実があるフレームに合っていないければ、そのフレームは保持され、示された事実のほうが無視される。)
- ・ Neuroscience tells us that each of the concepts we have—the long-term concepts that structure how we think—is instantiated in the synapses of our brains.... We may be presented with facts, but for us to make sense of them, they have to fit what is already in the synapses of the brain. Otherwise facts go in and they go right back out. (神経科学によって明らかにされたところでは、私たちが持っている概念 (いかに思考するかを構成している長期的諸概念) は脳のシナプスに具体的実体 [シナプス結合] として存在する。(中略) 事実を示されても、それを理解するためにはその事実が脳のシナプスに既存する概念構造と整合しなくてはならない。さもなければ事実は一度は頭に入ったとしてもまたすぐ外へ出て行ってしまう。) (Lakoff 2004:17 筆者 訳)

事実であればだれでもが受け入れ信じるわけではない。むしろ、私たちは自分が受け入れることができる内容を事実と見なす傾向が強い。あるいは「見ること」自体が、「理論負荷的である」といい直すこともできる。見ようとする姿勢や態度の中にすでにある種の固定観念や先入観があり、それと食い違う現象は見定めることすらできないし、記憶にも残らない。<sup>6)</sup>

部分からより大きな全体を構築していく、という意味で世界認識の把握はポ

トムアップのように見えるが、実は一方で、部分部分の情報をメトニミー的に解釈しより大きな構造に組み込んでいく際のフレーム選択・処理過程はトップダウン的であり、既存の安定状態にある世界認識に収斂していくという傾向(および危険性)がある。

## 5. 意味地平(部分と全体の相互作用による循環的な意味決定)と構文文法

言語システムにおける部分と全体の関係は、前節に述べたメトニミーとは別に、各語彙の意味とそれを含む構文との関係、構文の具体的事例の容認可能性の問題、語彙と構文それぞれの意味変化および多義構造といった言語現象にも関連性を持つ。以下の谷(2001:188)の指摘を、構文と語彙の関係に対応させて考察してみよう。

・個別的对象の意味と意味地平の関係は、部分と全体との「解釈学的循環」の関係にある。すなわち、部分の意味を決めるためには全体の意味が前提され、しかし、全体の意味を決めるには部分の意味が前提される、という循環的な関係である。

全体と部分のそれぞれの解釈において、どちらか一方が他方を規定するのではなく、全体と部分が相互作用的に規定し合う、という上記の見解を、構文文法との関連で考察してみたい。英語の動詞 kick が異なる構文形式の述部動詞として使用された場合に文全体の解釈がどうなるか、という問題に当てはめてみよう。

- (13) a. Pat kicked the wall.  
b. Pat kicked Bob black and blue.  
c. Pat kicked the football into the stadium.  
d. Pat kicked at the football.  
e. Pat kicked his foot against the chair. (Goldberg 1995:11)

構文文法(Construction Grammar)を提唱する Goldberg は、動詞語彙自体がそれぞれ別の多義的意味を持ち、従ってその多義的意味に応じて具体化される項構造が異なるという語彙意味論の説明を棄却し、まずスキーマ的な構文形式(他動詞構文、結果構文、使役移動構文など)があり、それぞれの構文形式自体が独自の意味構造を持つという構文主義に立ち、意味決定においては構文構造が優位にあるという立場を取る。つまり語彙と構文の意味関係を、語彙の意味が先に規定されるのか、それとも構文形式の意味が先行するのか、という

ニワトリとタマゴのどちらが先かという問題として扱う。しかしながら、仮に語彙意味論の立場を取り kick という動詞語彙自体に意味を見出すことができると仮定する場合にしても、kick という単語一つで独立してアプリアリに意味が決定されているわけではなく、やはり何らかの構文構造に埋め込まれた具体的使用事例としてある具体的状況に対して〈企投的〉に使用されて始めて語彙形式が意味を担うはずであり、動詞語彙 kick の意味構造も過去における何らかの構文形式での使用事例に依拠しているはずである。ある語彙に対して文脈抜きでどのような意味構造がすぐに頭に浮かぶかは個人あるいは特定集団の使用頻度の問題であり、kick の場合は (13a) のような単純他動詞構文での使用頻度が高いのかもしれない。このように考えると、「動詞語彙」と「構文」との相互作用を問題にする場合も、実際はその動詞語彙の意味の背景に既に暗黙のうち何らかの構文構造が存在しなければならず、結局は、様々な語彙と構文構造の膨大で複雑なネットワークが相互に意味を規定し合っているとしか考えられない (山梨 2001:218-227 も参照)。このことは言語知識や文法がどのようなものでありうるかを明確に示している。

## 6. おわりに

本稿では、言語の意味の在り方をめぐって、言語学的 (認知言語学) な観点と哲学的 (現象学) な観点をあいで共通する思考方法の可能性を模索した。現象学という哲学的思考の方法が人間の言語活動の解明に有効な手段であり、認知言語学の原理と矛盾せず、重なり合う側面が多くあることが示せていれば幸いである。さらにここに自然科学的 (発達論) な観点を加えるために、言語習得における使用依拠モデル (Tomasello 1995, 2001) に関して論及すべきであるが、これについてはまた稿を改めたい。

**謝辞:** 本稿をまとめるにあたり、本学准教授村尾治彦氏および学外の査読者より貴重なご教示を賜りました。心から感謝いたします。

### 主要参考文献:

- 宇都宮裕章 2006 『教育言語学論考—文法論へのアンチテーゼと意味造りの教育—』 風間書房
- 門脇俊介 2004 『フッサール—心は世界にどうつながっているか—』 NHK 出版
- 黒滝真理子 2005 『Deontic から Epistemic への普遍性と相対性—モダリティの日英語対照研究—』 くろしお出版
- 竹田青嗣 2001 『言語的思考へ—脱構築と現象学—』 径書房

- 竹田青嗣 2004 『現象学は<思考の原理>である』 筑摩書房
- 谷徹 1998 『意識の自然—現象学の可能性を拓く』 勁草書房
- 谷徹 2002 『これが現象学だ』 講談社
- 中山元 2007 『思考の用語辞典—生きた哲学のために—』 筑摩書房
- 長滝祥司 (編) 2004 『現象学と二十一世紀の知』 ナカニシヤ出版
- 西研 2005 『哲学的思考—フッサール現象学の核心—』 筑摩書房
- 西村義樹 2005 日本認知言語学会第6回大会ワークショップ “Frames, Figurative Language, and Category Structure” ハンドアウト
- 西村義樹 2006 “Metonymy Underlying Grammar” 『日本認知言語学会論文集 第6巻』 日本認知言語学会 pp.565-568.
- フッサール、E. 1997 『フッサール現象学の理念』 長谷川宏 (訳) 作品社
- フッサール、エドムンド 1979 『イデーニ I』 渡辺二郎 (訳) みすず書房
- 福岡伸一 2008 『できそこないの男たち』 光文社
- 山梨正明 2004 『ことばの認知空間』 開拓社
- Aitchison, Jean. 2003. *Words in the Mind: an Introduction to the Mental Lexicon*. 2nd ed. Oxford, Blackwell.
- Croft, William and D. Alan Cruse. 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge University Press.
- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1995. Raising and Transparency. *Language*. 71. 1-62.
- Langacker, Ronald W. 2000. *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press.
- Lakoff, George. 2004. *Don't Think of an Elephant!* Chelsea Green Publishing.
- Lee, David. 2001. *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Oxford University Press.
- Tomasello, Michael. 1995. *The Cultural Origins of Human Cognition*. Harvard University Press.
- Tomasello, Michael. 2003. *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*. Harvard University Press.
- Vygotsky, L. S. 1986. *Thought and Language*. trans. and ed. Alen Kozulin. Cambridge, Mass. MIT Press. (邦訳『思考と言語』柴田義松訳 新読書社 2001)

注：

- 1) 「原理」という言葉使いについて、ここでの「原理」とはそれが永遠の真実である、あるいはそれ以上は分析不可能な根源的なものである、ということの意味しているのではない。むしろ、「それが普遍的な可能性を開示して目標を作り出すような考えだということであり、より大きな可能性の原理が示されるときには、いつでもそれに代替されうるものだ（竹田 2004:260）」という意味合いで使っている。
- 2) 西 (2001:144) を参照。
- 3) 「捉え方 (construal)」に関する認知要因については、Croft and Cruse (2004 第3章) も詳述している。
- 4) Langacker(1995) など。
- 5) プロファイルシフトという認知プロセスを言語習得の観点からみることもできる。言語習得段階初期の子供にとって、その時に発せられた言語形式が、直接体験している現場の全体的ゲシュタルト構造の中のどの部分を指示しているのかを見極めるのは難しい。このことから語彙の意味の不確定性という言語の根本的特徴を指摘することができる。「ヤカンが沸いている」という発言のあった場面の全体を、大人が過去の経験や世界知識（常識）に照らして目に見えない部分も想定すれば、この場合の「ヤカン」は当然「水の入ったヤカン」であり、「水が入っている」という「見えない」状況が「ヤカン」という言語表現の重要な意味要素になっている。Vygotsky (1986:127) は、子供の言語習得の際にその場面のどの部分を言語表現の意味として抽出するかが場当たりに一貫性なく変化してしまう例を挙げている。それによれば、ある子供は quah という一つの単語を、まず「池で泳ぐアヒル」を指して使ったのに始まり、次に「瓶に入った牛乳、その他の液体」（池の水からの連想）、その次に「ワシの模様があるコイン」（アヒルからの連想）を指して使ったという。それぞれの場面で異なる部分的連想（池の水・アヒル）によって quah を使ってしまった。Vygotsky はこれを典型的な「複合連鎖 (chain complex)」の例であるという。つまり、同一語彙によるどの指示対象も別のもう一つの指示対象と何らかの属性を共有しているが、その共有される属性自体は一貫しておらず、次々と変化してゆく。なお言語形式と意味の関係をめぐってフッサー（現象学）とヴィゴツキー（発達心理学）の共通点を指摘した論考については宇都宮 (2004:32-37) も参照。
- 6) 科学分野においては観察が理論負荷的であることは周知である。福岡 (2008) は、学生による臍臓細胞の顕微鏡観察の拙さについて、「私が臍臓の細胞を見ることができるのは、それがどのように見えるかをすでに知っているからなのだ。（中略）つまり、私たちは知っているものしか見る

ことができない」といい (p.54-55) 、またスティーブンズによるY染色体の発見について、「もちろん誰の目にもそれが見えたのではなく、ネッティー・マリア・スティーブンズのみだけがそれを見たのだ。ところが全く不思議なことに、ネッティーがそう言明して以来、彼女だけに見えていたものは、誰の目にも見えるようになったのである」という (p.79) 。